

産業観光施設の紹介

新しい観光のあり方“産業観光”が、中部圏において積極的に進められています。“産業観光”は、産業の内容を対象とする観光で、生活の中の商品・サービスが提供されるまでに、どのような歴史や技術があるのかを発見し、体験する知的好奇心にあふれた観光です。

具体的には、製造業の工場見学や、伝統産業の体験プログラム、企業博物館などがあげられます。こうした施設を訪ねる機会は、従来から社会見学や企業視察などがありましたが、特定の団体や目的に限らず、個人客や家族客などの一般観光客でも楽しめるよう門戸を広く開放していこうとするところに“産業観光”の特徴があります。

今回は、福井県鯖江市の「めがね会館」を紹介します。

「めがね会館」をリニューアルし、産業観光の拠点に

—福井県鯖江市—

(財)中部産業・地域活性化センター
客員研究員 青山 征人

(資料1)



地上高さ44mのめがね会館の屋上には大きなめがねが。

福井のめがねを全国発信

福井県は、全国のめがね枠の96%を生産し世界の20%のシェアを持つ日本最大のめがね産地。チタン合金や形状記憶素材をいち早く取り入れるなど品質重視のモノづくりや優れたデザインで世界をリードしてきたが、中国から安価な製品が大量に流入する一方、「スリープライスショップ」な

どと呼ばれる安売りショップが乱立、鯖江市を中心とする産地は苦境に立たされている。社団法人福井県眼鏡協会では、福井県、鯖江市の協力を得て、鯖江市新横江の「めがね会館」を思い切ってリニューアルしたり、「THE291」をはじめとした産地のオリジナルブランド製品の普及を推進するなどの努力を行っている。2010年3月リニューアルオープン予定の「めがね会館」はめがねの歴

史史料の展示、プラスチックフレームの製作、メタルフレームの1本作りなどの実演、正しいめがねの選び方相談、最新製品の展示と販売など、めがねの全てを見てもらい、国産めがねの「安全・安心・感動・満足」を実感してもらおうと同時に、福井県の産業観光拠点と位置付け、観光客の誘客を促進することを狙っている。今回は完成を先取りするかたちで産業観光施設としての「めがね会館」を紹介する。(資料1)

鯖江市を始め福井県丹南地域と呼ばれる周辺2市3町には、めがねのほか越前漆器、越前和紙、打刃物、越前焼きなど全国に誇りえる伝統産業が多くあり、これらを結んで産業観光ルートを整備し、さらに歴史的建造物や温泉などを組み合わせれば、滞在型観光地として飛躍する可能性は高い。

めがね作りは明治に入ってから

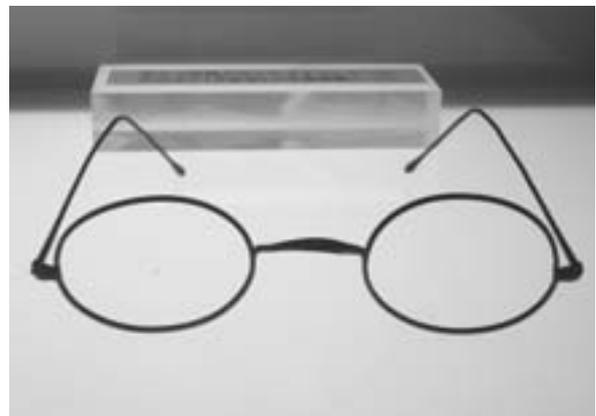
鯖江市は、福井県の中央に位置し、北は福井市、南は越前市に隣接した東西18.6km、南北8.4km、面積84.75km²のこじんまりした地方都市。クルマで15分も走れば市内を突き抜けてしまう。人口6万8,000人は福井市、越前市、敦賀市に次ぐ県内4番目だが、繊維、漆器、めがねの地場産業が早くから発展しているのと、JR北陸線、私鉄福武線、国道8号、417号が南北を縦貫する上、北陸自動車道鯖江ICが開設されるなど交通網が充実していることで人口はわずかながらも増加傾向をたどっている。鯖江市は、中世には浄土真宗じょうしゅうじ誠照寺派本山誠照寺の門前町、江戸時代中期には、まなべ間部藩5万石の城下町、さらに1898年(明治31)には第9師団(金沢)の鯖江歩兵第36連隊が設置されたことから軍隊の町として発展してきた。

鯖江のめがね業界がスタートしたのは意外に遅く、1905年(明治38)のこと。同県足羽郡麻生村生野(福井市生野町)の庄屋、増永五左衛門が農家の副業に取り入れる仕事はないか、模索していた。生野は戸数36戸で、田畑がわずか17haという寒村で、冬は雪に閉じ込められて働けず、農民

の暮らしは極端に貧しかった。五左衛門が思案していたその頃、実弟の小八(後に幸八)が、同じ村の増永五作とともに大阪に出て、めがねを扱う明昌堂橋本清三郎の家でめがねケースの製作を手伝っていた。「これからの日本は教育が普及し、文字を読む人が増えるため、めがね事業は有望」と判断した2人は故郷に戻って五左衛門に相談した結果、衆議一決。大阪からめがね工3人を招き、近在の子弟を集めて技術指導を受けさせた。これが鯖江市のめがね産業の始まりである。当時のめがね枠は、金と銅の合金である赤銅縁が中心だが、今のように機械があるではなく、やすりやヤットコといった作業工具を使っての手作業だった。めがねは構成する部品の数こそ20種類程度だが、めがね全体のサイズがフロント(前枠)、テンプル(つる)とも15cm前後の小さいものだけに、部品のサイズも小さく、大変な努力を必要とした。折りたたむところのねじ一本まで手で作ったのである。始めは失敗の連続だったし、返品の山をこしらえたこともあったという。しかしこうした困難を福井県人特有の粘りと、「帳場制」と呼ばれるグループ活動で克服し、第一次世界大戦前後の1917年(大正6)には工場数で12工場、年間生産量4,000ダース(1ダースは12個)にまで拡大した。さらに1937年(昭12)には、戦争特需も重なって工場数72工場、生産数量13万ダースとさらに飛躍的に増加した。

一方、この頃からセルロイド(硝酸セルローズ

(資料2)



1990年代初頭に作られためがね枠。すべて手作業であった。

(資料3)



めがねの製造工程はメタル枠で300工程、セル枠で100工程が必要。写真は最終工程に近い。竹内光学工業で。

韓国の追い上げ。特に90年代後半からは価格の安い中国製が大量に国内小売市場に流入するとともに、輸出市場でも日本勢を脅かすことになった。

めがね枠の製造は、生産方式によって3つに大別される。ハウスブランドと呼ばれる自社製品、欧州の有名ブランドとライセンス契約した製品、海外または国内大手メーカーから受注したOEM（相手先メーカーの商標をつけた生産）製品である。福井県の場合、自社ブランドを付けて製造する企業は少なく、OEM生産が圧倒的に多い。OEMは、販売に苦勞する必要がない分、品質向上やコストダウンなど生産に力を入れれば良かったが、競争相手が出てくればそうもいかない。これまで発注してきた海外メーカーは、より安く製造できる産地や企業に鞍替えするためである。今やその最大のライバルが中国。安い賃金を強みに規格大量生産を実現し、日本市場を脅かしている。

といっても、中国に初めから高度な技術があるわけではなかった。1981年（昭56）に鯖江市が中国からめがね枠生産の技術研修生を受け入れ、指導したのである。さらに90年代に入ると、鯖江市の企業そのものが中国に進出することで品質を高め、日本に逆輸入してきたのである。（資料4）

めがね会館建設

北陸自動車道を米原ICから福井市に向かって北上すること1時間余、鯖江ICの手前左側に見

(資料4)



めがね会館入口の横看板。一般の人には何のことかわからないが、業界の苦しい事情を物語る。

えてくる背の高いビルが「めがね会館」である。地上高さ44mはこのあたりで群を抜くが、なによりユニークなのはビルの外観。凸レンズを想像させるゆるいカーブをもった長方形ビルで、色はフレーム色の薄茶色。屋上には赤色フレームの大型めがね模型が飾られており、一目でめがねの産地だと分かる、業界のシンボルともいべき建物。産地生誕80周年を迎えた1984年（昭59）5月に工費12億円をかけて完成した。地上10階、地下1階、延べ2,690㎡の展示棟と管理棟からなり、展示棟には展望レストラン、多目的ホールのほか、製品展示、めがね博物館、目の科学館、めがねとファッション館などめがねの全てを発信する施設を整備した。（資料5、6）

オープンして81日目には来場者数1万人を突破、85年5月の一周年には3万人の来場者を記録するなど好調な出足だった。

しかし、開館10年になると建物の傷みが目立つようになり、入館者も減少してきたことから、一部展示棟をリニューアルすることにした。小売店の反対を押し切った格好で、2階にメガネショップを新設したのである。その理由は、来館者の「産地なのにサングラスも買えないのか」との批判に応えたもので、サングラスや老眼鏡、めがねアクセサリー、県内の特産物の販売を行った。それでも客足は大きく好転せず、そこに平成不況が重なった。製品PRのための展示ブースから出展企業が次々脱落するとともに、入居しているめがね

(資料5)



初期のめがね作りは、すべて手作業だった。めがね会館にはその頃の道具が保存されている。

(資料6)



めがねの起源は諸説あるが14世紀には両眼の鼻眼鏡をかけた老人の肖像が描かれている。めがね会館には17世紀に中国で作られためがねとめがねケースが保存されている。

関係団体の会館運営負担金が重荷になってきた。福井県眼鏡協会では、会館の維持運営が困難と判断し、1998年（平成10）に展示棟を休館し、以後貸し館として運営してきた。

産地統一ブランド「THE291」

めがね会館建設から26年。眼鏡業界を取り巻く環境は大きく変わった。自動車、家電など耐久消費財と同様に、めがね業界も経済のグローバル化によって、地球規模の大競争時代に巻き込まれた。中国が生産拠点としての実力を付けるのに従い、販売業者（卸業者）は発注先を次第に中国に切り替えた。また国内市場では、新しい小売業態「スリープライスショップ」と呼ばれる、中国製フレー

ムに韓国製レンズを組み合わせた5千円、7千円、9千円という低価格販売ショップが数多く出現し、その余波は産地にも及んだ。

「このままでは生き残れない」と業界では危機感を募らせ、OEM生産からの脱却を試みることになった。2003年、それぞれのメーカーが自社のオリジナルブランドを立ち上げるとともに、業界では、それを支援するために福井県の「ふくい」をもじった産地統一ブランド「THE291」事業をスタートさせた。「THE291」ブランドは、品質、デザインなど厳しい審査をクリアした製品だけに与えられる称号。さらに、2008年には国産めがねの優秀性を知ってもらうために、大消費地である東京・南青山3丁目に東京ショールーム「ガラスギャラリー 291（通称GG291）」を開設した。メーカーが直接消費者に接し、消費者ニーズを把握して製品作りに生かすと同時に、消費者にもメーカーサイドの思いを知ってもらい、さらには全国の小売店に、産地の最新モデルを見てもらうチャンスと考えたのである。

再度リニューアルに挑戦

こうした中、産地としての知名度を上げるためには、しばらく休業等をしためがね会館のショールームを再開する必要があるとの声が高まってきたが、当然ながら「また失敗するのでは」との異論が出た。しかし、国産めがねファンを増やすには、見て、触れて、買うことができる産地の拠点が必要、過去の失敗を教訓として、顧客本位の喜ばれる施設を作れば認知度は高まるし、観光客を呼び寄せることにもなる、こうした意見が今回のリニューアルに結実した。

福井県が1,500万円、鯖江市が2,000万円を助成し、自己資金1,500万円の合計5千万円をかけてのリニューアルである。リニューアルの目玉は、体験型施設への変身とめがねミュージアムの拡充、販売機能の拡充。

100年前の工場風景を再現し、リタイアした職人さんが糸のこ1本でプラスチック枠を作り出す

のを見てもらう。観客にはアクセサリ作りや糸のこ教室に参加してもらう。またミュージアムでは、アンティークめがねだけでなく、有名人のめがねを展示するなどアミューズメント性を打ち出す。さらにこれまで最大の課題だったショップ機能の拡充も図られる。ショップには「認定眼鏡士」資格を持った販売員を配置、検眼機器、レンズ加工機が導入され、全国の小売店の模範になるようなショップ運営を展開していきたいとしている。各種めがねのほか、めがね技術から派生した箸、耳搔き、ネックレスなどチタン関連グッズなども販売する。

観光資源豊富な福井県

全国調査によると、県別の「住みやすさランキング」や「グルメランキング」で福井県は最上位にあるものの、地域ブランド力（知名度）となると極端に低い。県民性が地味で、PRが得意ではないのが要因と思われるが、観光、地場産業についても情報発信が行き届いているとは思われない。鯖江市を始めとする福井県丹南地区には産業観光の宝庫といっても良いくらい伝統産業がそろっている。それも半径10km圏の近場である。鯖江市のめがね、漆器、越前市の和紙、打刃物、越前町の越前焼きなど。漆器は、1500年前、第26代継体天皇の冠を修理したことに起源を発する歴史を持ち、鯖江市西袋町の「うるしの里会館」周辺には今も多数の工房があり、全国の業務用漆器の80%を生産するほど。うるしの里会館では伝統工芸士による「木地作り」、「塗り」などの実演が行われている（資料7）。また越前和紙作りも同じ1500年前に伝えられたとされ、上質の楮（こうぞ）で漉かれた同和紙は公家、武家、寺社などの公用紙として重用された。今も越前市新在家町周辺には多くの製紙工場がある。近くには歴史資料を展示する博物館、紙すき家屋を移築した工芸館、紙すき体験する「パピルス館」の3館からなる「和紙の里」が整備され、国の重要文化財に指定されている大瀧神社本殿も近い（資料8）。同じ越前

市では700年前の南北朝時代に京都から伝えられたという打刃物を作っている。性質の違う2種類の鋼を熱して、たたく伝統的技法をそのまま伝承しており、包丁、鎌などの製品は重厚そのものである。同市池ノ上町の「越前打刃物会館」では実際の生産風景を見学できる（資料9）。最後に越前焼きは日本六古窯のひとつに数えられており、越前町の陶芸村では陶芸教室が開かれている。

これら産業観光施設をじっくり見学すれば1日で見切れるものではない。周辺には越前海岸や東尋坊の自然景観や温泉、一乗谷朝倉氏遺跡、永平寺など歴史遺産など見学するところは多く、これにカニ料理、おろしそばが加われば最高の旅になる。観光といたら失礼になるが、鯖江市には旧陸軍歩兵第36連隊跡がわずかながら残されており、連隊史料を集めた平和祈念館もある。「坂の

（資料7）



うるしの里会館では伝統工芸士による実演が行われている。角盆一つを作るにも何度もうるしを塗る手間のかかる作業。

（資料8）



紙すき家屋を移築した卯立の工芸館。

上の雲」(NHK放映)の日露戦争で登場する、乃木將軍の第3軍に属し多くの犠牲者を出しながら難攻不落といわれた旅順要塞を攻撃したことで、その強さが知られている。(資料10)

(資料9)



刃物の里の大看板。越前の打刃物は今も伝統的技法をそのまま継承している。

(資料10)



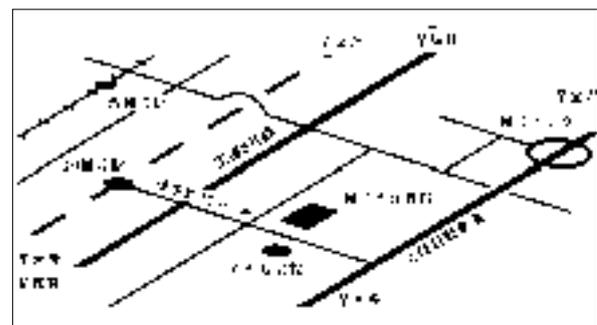
鯖江歩兵第36連隊の資料を集めた平和祈念館。遺族会といっても子供、孫の世代が大切に守っている。

参考文献

- 「眼鏡の歴史」(日本眼鏡卸組合連合会、1960年)
- 「福井県史・通史編」(福井県、1996年)
- 「産業集積の地域研究」(大明堂、2002年)
- 「めがねと福井」(福井県眼鏡協会、2005年)

めがね会館産業観光拠点化の概要	
住所	〒916-0042 福井県鯖江市新横江2の3の4
TEL	0778-52-9111
FAX	0778-52-9110
URL	http://www.megane.gr.jp/
開館日時	2010年3月19日(予定)
開館時間	10:00 ~ 19:00
休館日	毎週火曜日(但し祭日など休日の場合は翌日)と年末年始(12/31 ~ 1/2)
入場料	無料
アクセス	
●JR	: 北陸本線鯖江駅下車タクシー5分
●自動車	: 東海北陸道鯖江ICから5分

図2 案内図



インタビュー



福井県眼鏡協会専務理事
坂野 喜一 氏

—この「めがね会館」にめがねに関する観光スポットを作る計画が進んでいると聞きました。理由はなんですか。

名称を「めがね会館産業観光拠点化計画」と言います。全国からめがねファンに来てもらい、当地のめがねを「見て、触れて、買って」いただく拠点にするとともに、福井県の観光振興に貢献したいと思います。福井県、特にこの鯖江市は全国のめがねの96%、世界の20%を生産する日本最大の産地です。しかし県外に出ると、知らない人が多いばかりか、我々からみると、めがねの正しい知識を持たずに、顔に似合わないめがねや、視力に合わないめがねを無頓着に使用している人が多くて、もっとめがねそのものの正しい使用法をPRする必要があると考えたのです。めがねのデザインひとつで顔の表情は随分変わってきますし、度数の合わないものをかけると目にも、健康にも良くない。このところのデフレ経済を反映して、品質より価格を優先する人が増えていることが心配でなりません。それに外国製の低価格製品が大量に流入すると、国内市場は価格競争に巻き込まれ、街のめがね屋さんや産地の経営を圧迫します。

そこでめがねについての歴史から最新製品の展示、製作風景を見ていただき、正しいめがねの選び方を学んでもらうとともに、納得いただければ

購入してもらおうという計画です。

—産地PRのため東京に08年にショールーム「GG291」を立ち上げましたし、産地統一ブランド「THE291」も制定しました。

東京・南青山に福井県眼鏡協会の東京ショールームとしてオープンしました。消費者はどんなめがねを求めているのか、どんなデザインを好むのか、福井のめがねの強みはどこにあるかをリサーチするためです。これまで我々はメーカーから発注を受け、品質向上やコスト低減だけに専念しておればよしとして販売まで考えなかったし、消費者心理まで考えることは及びも付かなかった。ショールームを開設して販売の苦労が分かりました。お客様はデザイン、カラー、価格を厳しくチェックします。簡単には財布のひもを緩めてはくれません。また、お客さんが来てくれるのを待っていただけでは売れません。こちらから提案する位の積極さも必要なことが分かりました。ショールームで学んで、東京に直販店を持つ企業が出てきました。

「THE291」は、世界最高級の品質の製品だけに与えられるブランドです。合格するには耐久性、耐圧性などISOが定めた基準をクリアする必要があります。まだ消費者にこのブランドは知られていませんが、私は福井産めがねを世界に知られるブランドに育てていきたいと思っています。

幸い、日本人の「本物志向」は強まっています。食品、電気製品、精密機器もそうですが価格より品質重視になってきました。めがねも「価格は高いが、本物はどこか違う」と思っていただけのようにしていきたい。「THE291」などの産地ブランドを知ってもらうための拠点が必要なのです。

—「産業観光拠点化計画」の特徴を教えてください。

過去の経験を生かして、来場するお客様にめがねを購入していただくショップ機能を充実させたい。そのため「認定眼鏡士」資格を持った販売員が、お客様の視力検査を行い、最適なレンズを選ぶとともに、使用目的、好みのデザインなどを

ヒアリングして、その人に最も適した商品を提供するオーダーメイドめがねに力をいれます。展示のレイアウトも変えます。1階の管理棟部分だったところをショップや展示室などに変更、入館者には、体に負担をかけない平面移動で、楽に見てもらおうようにする。その一角では、現職を退かれた職人さんにプラスチックフレームの1本作りなどの職人技を披露してもらうことで、入館者に楽しんでいただき、アクセサリ教室や糸のこ教室なども体験していただきます。娯楽性も重視します。イベントを開催し、作り手、消費者と一緒に楽しむ機会を設ける必要があります。幸い福井県や地元鯖江市が応援してくれますので、業界としてもがんばって資金を集め、入館者、消費者の立場に立った目線で新しい施設を作っていくと思います。めがね会館が面白いとの評判をとればリピーターが期待できるし、県内への観光客は増えます。

福井県への観光客数は、2008年度で1,026万人と初めて大台を超えました。連続テレビ小説やオバマ効果によるものと思われませんが、それでも石川県の観光客数に比べると半分です。観光資源や食べ物にそんなに差があるとは思いません。温泉だって越前海岸はもとより、鯖江市にも多数あります。地場産業、伝統産業と観光資源、歴史遺産などを上手くネットワーク化すれば観光客に喜ばれるルート設定ができます。めがね会館は産業観光の中核となる施設を目指します。「THE291」ブランドを消費者に意識してもらうには時間がかかると思いますが、東京の「GG291」とめがね会館の2カ所で情報を発信、国民の認知度を上げていきたいと思っています。(資料11、12)

(資料11)



浄土真宗誠照寺派本山の誠照寺山門。県指定の文化財で、左甚五郎作と伝えられる彫刻が有名。

(資料12)



カニも美味しいが、そばも絶品。丹南地域にはあちこちにそば屋があり、どこで食べても当たりはずれがない。おろし、とろろ、ざるの三昧と天ぷらで1,150円。